

堂本彰夫  
の  
古代史問答

堂 本 彰 夫

2020年5月

※この「堂本彰夫の古代史問答」は、別途作成している「私的日本古代史考」の「試作版」を下にして、広くみなさんに分かってもらえるように作成している「問答形式による、『最終版』作成に向けての重要論点整理」をまとめたものです。これまでの論稿に加え、これについても、よろしくご笑読？いただければと思います。なお、これまでの個々の論稿すべては、下記ホームページ上に掲載していますので、併せてご笑読？いただければ幸いです

(令和2年5月)

<連絡先>

ホームページURL⇒<http://www.gakuyou.jp>

メール・アドレス ⇒[gakuyou17@outlook.jp](mailto:gakuyou17@outlook.jp)

## 目 次

- ① 『日本書紀』は、当時の政権勢力？（幾つかの氏族）の合意と駆け引きの中で編纂された?!
- ② 「淡海三船」という人物が、『日本書紀』の構図（からくり?）を指し示してくれている?!
- ③ 「(中国) 江南」→「伽耶（新羅）」→「百済（北方）」系倭人の渡来と政権化（倭国→日本国）の実相?!
- ④ 「記紀神話（神代）」は、単なる「創作話（お伽話 or ファンタジー?）」ではない?!
- ⑤ 「神代」は、神武以降の史実（建国史?）を俯瞰（デフォルメ?）したもの?!
- ⑥ 「国譲り」 & 「天孫降臨」が、「記紀」の大きなモチーフ?!
- ⑦ とは言え、やはり? 「記紀」の読み込み（裏読み?）だけでは限界がある?!
- ⑧ 二つの「倭国」? 実は、ここに、その萌芽があった?!
- ⑨ 改めて、「記紀」をどう読み込めばよいのか? 編纂の意図とか、その関係等は?!
- ⑩ 最後に、「二つの倭国」と「倭の五王」の関係（事実?）をどのように解き明かせばよいか?!

①『日本書紀』は、当時の政権勢力？（幾つかの氏族）の合意と駆け引きの中で編纂された?!

I :Dさんは、これまで、HP上で、「古代史の旅」と題して、我が国の古代史解明の試み（挑戦?）をされているわけですが、最近では、自分の作品?に少々手を焼いているようにも思えますが、いかがですか?もしそうなら、一度、その論点整理をするためにも、誰かと問答することも、一つの手かと思うのですが?

D :まさかこんな形で、そういうことを、あなたに提案されるとは思っていませんでしたが、一応「試作版」として、それなりの集大成?を為してはきたものの、徐々に、全体として、どういうことを書いているのか、どう書けばよいのか、自分でもよく分からなくなってきたことは事実です?!

I :やはり、そうでしたか!もし、そういうことでしたら、ここで、私との問答形式で、幾つかの重要論点整理を行えば、Dさんなりの古代史解明が、さらに進んでいくということになりませんか?!

D :そういうことになりますかねえ…?尤も、これまでは、あくまで自分のために書き記してきたわけですので、それはそれでいいのですが、どうもここに来て、他の人にも分かって欲しいという思いが、一方で募ってきているようには思えますので（文章が難しいとか、前後の文脈がよく分かっていないので理解しづらいとかという風聞もあるのでは?）、思い切って、そのウォーミングアップ（前哨戦?）ということで、少しやってみますかね?!

I :そうですよ!しかも、他人事と思えない私でもありますので（笑い?）?!ということで、早速問答を始めていきたいと思いますが、まずはどういうことが、その論点整理で重要だと思っていますか?

D :そうですねえ、やはり途中から思い始めたことですが、いわゆる「正史」（自国の歴史の公式陳述）とされる『日本書紀』が、当時の最高権力者?であった「藤原不比等」の主導で編纂されていったものであることは、ほぼ間違いないと言えそうなのですが、そこには、さらに、彼の作為に乗じて（同調して?）、誰かあるいは幾つかの氏族の主張や思惑も絡められているのではないかと、そんなことを、強く感じます!

I :最初の、藤原不比等あるいは藤原氏の介在があったということは、今ではかなりの方が了解されてきているように思いますが（だが、まだまだ定説とはなっていない?）、ただそれだけではなく、他の人物あるいは氏族も、その『日本書紀』の編纂に積極的に関与していたのではないかとということですね?だとすれば、それもまた、ある意味大変な発見?と言えるのではないですか?

D :そういうことになりますかね?!とにかく、そのように見れば、怪しげな?

(辻褃が合わない箇所が多々ある?)『日本書紀』の内容あるいは、その作成の意図が分かってくるということですか?!端的に、「天武天皇」の発意であったことは事実でしょうが、かなりの紆余曲折を経て(そこからかなり遅れた720年の完成!)、結局は、誰のために、何のために書かれたものなのかが見えにくくなっている?!

I:ということは、その部分の新たな捉え直しがなされなければ、『日本書紀』が示す?我が国の建国史は正しく見えてこない?そういうことですか?!では、具体的には、それは、どういうことになりますか?

D:そうですね!まずは、「藤原不比等」の作為に乗っかって、自らの血統(存在→「天照大神」?)を創り上げた「持統」との共同作業があったことは事実でしょうが(天皇になっていたかどうかはともかく?)、実は、そこに、表向きはあまり前面には出ていませんが(そう出来なかった?)、何人かの人物(氏族)の参画あるいは同調意向?があったのではないかということですか?!

I:例えば、どういう人物・氏族ですか?

D:今、明らかにそうであると言えるのが、一緒に行動を共にした「中臣氏」!そして、おそらく「息長氏」と「秦氏」、さらには「賀茂氏」(ただし、ここは、「皇別氏族」とされている部分の方)です!「中臣氏」は、まさに「藤原氏」を自らの籍(→「天兒屋命」)に入れる(ことに同意する?)ことによって、「祭祀職(神道)」の筆頭家となった(ちなみに、そのことを、同じ「祭祀職(神道)」であった「忌部氏」が妬んでいた←忌部広成『古語拾遺』)!そして、「息長氏」と「秦氏」は、有力なパートナーであった?!特に「秦氏」の場合は、経済的な支援が甚大であった(ひょっとしたら、例の「乙巳の変」の首謀者?は「秦氏(河勝?)」であった?)?!「賀茂氏」は、京都(山城)での「秦氏」との協力関係から、そのように言える(→上賀茂神社/下鴨神社)?!

I:要するに、「中臣氏」は、「藤原氏」と利害が一致した?そして、「息長氏」「秦氏」「賀茂氏(の一部)」は、彼らの支援者・パトロンでもあった?だから、藤原氏(不比等)は、そこを付度した?!

D:そういうことです!少なくとも、そのような視点で、「記紀」、とりわけ『日本書紀』の内容を解説(裏読み?)してみる必要があるということですか!そして、ここが肝心ですが、その関係、あるいはその関係の経緯が、いわゆる「高天原神話」(「神武東征」等を含む)の「記紀神話」に投影されているのではないかということですか?!否、むしろ彼らの、個々の氏族神話(史実?)を、(自分達の)「万世一系の皇統譜」作成に、大いに採り入れたということですか?!もちろん、逆に、「物部氏」「蘇我氏」、さらには「多(大)氏」「尾張氏」「紀氏」等(本来は、こちらの方に正統性がある?)は、抹殺あるいは無視されたということですか?!

②「淡海三船」という人物が、『日本書紀』の構図（からくり？）を指し示してくれている？！

I：①に関連して、他に、何か面白いことはありませんか？例えば、これまで誰も指摘していないようなテーマとか、話題とか？

D：そうですねえ…そう言えば、それこそ世間をあっと言わせるような仮説（珍説？）があることはあります！まったくの素人の、しかも、ほとんどを、他人の研究成果に依拠している、さらには（傍目には？）、いわゆる「いいところ取りのつまみ食い？」しかしていない私ですので（事実かな？）、それこそ誰も耳を傾けないかもしれませんが、そのことを意識（確信？）したときには、我ながら大いに興奮したものです！

I：それは、聞き捨てならない話ですね！つまり、誰もまだ、そのようなことは主張（発見？）していないということですよ？けど、たとえそうであったとしても、よくある「トンデモ話」のようにも思いますが、まあ、私とDさんの仲ですので、率直に（気軽に、こっそりと？）話を聞かせてもらえれば嬉しいですね？

D：確かに、結果的には、その「トンデモ話」となるのかもしれませんが、実は、歴代天皇のうち、「神武」「崇神」「応神」、そして「神功皇后」という人物の漢風諡号（中国風の死後の贈り名）に冠されている「神」という字の意味とその関係に、「記紀」の、ひいては我が国古代史の大きな枠組み（からくり？）が埋め込まれているのではないかと？そういうことです！

I：大体、名前ぐらひは知っていますが、もう少し詳しく話を聞かないと、何が、どういうことなのか？ほとんど分かりませんが、その「神」という用字に、何か特別な意味があるということですか？

D：もちろんそれもあります（改めて、この4人にしか、「神」という字は使われていない！）、問題は、その4人の名前の関係性ということですよ！漢語の素養があるわけではありませんで、その個々の熟語には、それ自体の意味（その人物の特徴等？）が込められているのですが、私には、その4人の関係性が、何らかの形（意図）でもって暗示されているように思えるのです？！

I：実在かどうかはともかく、個々の人物（天皇？そして、その全員が、ある実在の人物の投影？）は、年代的には異なる時期の人物かと思われまますので、その関係性と言っても、直接には関係ないと思われまます？！単に、彼らが、ある意味重要な役割を果たした人物であったため、死後、それを称える「神」という字が使われた？そして、最もその人物に似合った熟語（意味）が賦与された？端的に、そういうことであつたのではないですか？

D：確かにそうかもしれませんが、しかし、実はこれも、あまり一般の人には知られていないと思われまます、「記紀」が編纂された後の、確か8世紀後半？

だと記憶していますが、それらの諡号は、すべて「淡海三船」（「天智系」の皇族？）という人の創作なのです（全天皇の漢風諡号を考案した！）！

I：え？そうなんですか！普通に今、私達が呼んでいる「〇〇天皇<sup>てんのう</sup>」という名前は、すべて、その「淡海三船」の命名ということですか？もし、そうであれば、実に大変なことをやってのけたものですね？

D：ええ、どうもそういうことのようなのです！まあ、一方であった「和風諡号」（〇〇天皇<sup>すめらみこと</sup>）は、長い名（しかも難しい呼び名！）であるので、ほとんど使わないし、だから馴染みもない？ということにもなりますが、それはともかく、ここが重要かと思いますが、その淡海三船という人物が、一人で（一度に？）、それぞれの天皇に名前を与えたということは、そこに、彼なりの歴史（自国史）の受け止め方、総括の仕方（哲学 or 主張？）が介在したのではないかということになります？！

I：確かに、そうですね？とは言え、何故、その「淡海三船」という人は、そういうことをしたのでしょうか？

D：私には、その辺の事情（動機等）はよく分かりませんが、少なくとも、彼には、「記紀」（直接には『日本書紀』）の編纂方針やその過程がよく分かっており（史実も含めて？）、そこに示されている内容や人物の事績を勘案して、表面的には（ツールとしては）、漢籍等を利用し（彼は、かなりの文人であった！）、それぞれの天皇に諡号を与えたと考えられます！そして、こと、この「神」の使用、そして、その「神」を使用した4人の人物の関係を、〇〇という熟語で示そうとした？！そういうことなのではないかということです！

I：そうであれば、この「淡海三船」という人は、大変な人物であったということになりますね？

D：その通りですね（文人としての矜持？あるいは他の何らかの思い？）！だから、こここのところも、改めて誰かが鋭意指摘（究明）してくれたらなああと、独り？期待しているところです！私には、当然？出来ませんから！

I：そう言われても困りますが、紙幅もないので、端的に、それはどのような関係だと考えているのですか？

D：要は、基（起）点が「応神」で、その応神を祖神化したものが「神武」、また、その両者に挟まって、「崇神」が、彼らを「崇める」、そして「神功（皇后）」が、「応神」の母（生みの親？）ということですか？！

I：そして、その関係は、実在の人物や勢力の関係と見ることができる？そういうことですね？

D：まさに、その通りです！それは、おそらく「江南系」「伽耶・新羅系」「百濟系」の、それぞれの渡来集団のこと（王権？）と思われませんが、その詳細（真実？）は、残念ながら、ここでは触れることが出来ません！

③「(中国) 江南」→「伽耶(新羅)」→「百濟(北方)」系倭人の渡来と政権化  
(倭国→日本国)の実相?!

I:とは言え、これまで、「記紀」、とりわけ『日本書紀』の受け止め方について、ある程度知ることが出来ました、実際の我が国の建国がどのようになされていったのか?その辺りが、改めて問われてきますよね?

D:そういうことになります、**「縄文時代」**はともかく(皮肉にも?これについては、不毛な?論争はない?!),**「弥生時代(紀元前8世紀以降?)」**になると、いわゆる**「倭人(種)」**が、朝鮮半島南部や列島各地に集住し始めます!問題は、その**「倭人(種)」**が、どのように我が列島に移住・定着し、その建国?をなしていったのかということになるかと思いますが、私は今、それは、時代順的には**「(中国) 江南系」→「伽耶(新羅)系」→「百濟(北方)系」**と変遷していったのではないかと、大枠では受け止めているわけです?!

I:つまり、その三つの勢力(渡来系倭人)が、波状的に?、列島各地に渡来・進出してきたということですね?

D:そういうことですが、もちろん、そのように明確に区切ることは出来ないと思います!しかし、主力?という意味では、まさにそういうことだったのだと思います?!ただ、現時点で最も把握(解釈)が難しいのは、その**「伽耶(新羅)系」→「百濟(北方)系」**の移り変わりの実相なのですが、残念ながら、「記紀」は、その部分を一番量している(隠している?)のです!

I:もし、そうだとしたら、何故、「記紀」は、その部分を量している(隠している?)のでしょうか?

D:当然、その部分を知られたくないということでしょうが、裏を返せば、その部分に大きな秘密(真実?)が隠されているということだと思います!実は、それが、②で紹介した**「応神」**の創出(→**「神武」「崇神」「神功皇后」**のトリプルスピンの?)であり、その部分の**真実?**が大きな鍵を握っているということです?!

I:改めて、それは、どういうことだったのですかね?

D:まだまだ明確に、そして、具体的には何とも言えない部分もありますが、一つは、「淡海三船」の暗示を介して?、そのことの可能性を追求しているということになります!もちろん、個々には様々な事実(←研究成果)が示されているわけですが(古墳の分布や発掘物の検討等)、その全体的な俯瞰が難しいということです!

I:それについて、何か有用なヒントというか、新たな手掛かりというようなものはないのですか?

D:それについては、既に私なりの打開策?として、「兼川晋」という人と「石渡信一郎」(及び彼の後継者と自認されている「林順二」「仲島岳」という人達)、

そして、「藤井耕一郎」という人の主張（研究成果）を整合的に受け入れることとしていますが、もう一つ、その土台・出発点（根拠の源）としては、「関裕二」という人の、まさに膨大な研究成果（著書）があることは言うまでもありません（残念ながら、最近では商業主義？に傾いている？）！

- I : と言われても、あまりにも茫漠？としていて、私には、どういうことなのか、さっぱり分かりませんか？
- D : それはそうでしょうが、その中で、一番のポイントが、「応神天皇（第 15 代）」の正体（出身地とその系譜）と、言わば実質的な？政権者である「継体天皇（第 26 代）」の正体（出身地とその系譜）の解明かと思えます！例えば、その両者が兄弟なのか、そうでないのか（百済系王族？）？あるいは、「応神」が、「百済系」なのか、「新羅系」なのか？そこら辺りが、もう少し解明されれば、「記紀」が暈している（隠している？）真実が見えてくるということですよ！最終的には、そこに、「蘇我氏」と「藤原氏」の関係も関わってきます？！
- I : ということであれば、それが、最初に述べられた、記紀神話、とりわけ「高天原神話」の内実（投影されているもの！）につながっているということにもなりますか？
- D : そうです！要は、持統・藤原政権（記紀編纂者）は、「乙巳の変」（645 年）によって、蘇我氏（本宗家）を滅ぼし、「白村江の戦い」（663 年）や「壬申の乱」（672 年）、そして「天武」の治世を経て、悲願の「倭国（再？）統一」（701 年の「大宝律令」制定→「日本国」の「倭国併呑」？）を果たすのですが、その間の経緯は、当政権にとっては、あまり知られたくないプロセスであった？！端的に、彼らに、「正当性」「正統性」がなかったということですよ？！
- I : 流れ、そしてその理由は、多少？分かってきましたが、具体的に、その「正当性・正統性」というのは、一体何なのでしょうね？基本的に、ある政権の「正当性・正統性」というようなものは、後（次）の政権者が、ある意味どのようにも操作？できるものなのではないでしょうか？実際、他ならぬ中国の歴代王朝は、そうしたことを繰り返してきたではありませんか（→革命・讖緯思想→「国史」の編纂）？
- D : そうだとも言えますが、その状況に立ったのが、ごく近場のことであれば、その説得？には、かなりのエネルギーと時間を割くのではないのでしょうか？！しかも、前政権とはまったく関係のない政権であれば、逆にあからさまに、前政権の不当性（悪徳？）をあげつらうと思えますが、自らの「正当性」「正統性」自体が後ろめたいものであれば、その真実性を過剰に主張し、他方では、そこに可能な限りの不整合を散りばめる？全体が分からないようにするためですよ？！それが、「記紀（日本書紀）」の役割であった？！（当時の）「国史」の編纂というものは、ある意味そういうものだったのかもしれないよ？！

④「記紀神話（神代）」は、単なる「創作話（お伽話 or ファンタジー?）」ではない?!

I:だから、まずは荒唐無稽で、神秘的な話として、言い換えれば、誰もが否定（反発?）出来ないような形で、「記紀神話（神代）」を創出し、自分達の「（創られた?）正当性・正統性」を、その物語（「万世一系の皇統譜」）に託すことにした?!まさに、「高天原神話」とは、そういうものであった?!

D:おそらく、そういうことであつたろうと思います?!ただし、それらは、単なる「創作話（お伽話 or ファンタジー?）」ではなく、あくまでも史実に基づくものとした?!何故なら、まったくの作り話では話になりませんからね?!そこに、何らかの、現政権の正統性（正当性はともかく?）の淵源があつたとするわけですからね?!

I:そして、そこには、当時の関係氏族・勢力との関係、さらには、その関係氏族・勢力の言い伝えや言い分等が採用され、それらが、互いに都合よく再構成（借用?）された?そういうことでもあつた?!

D:そうです!そうでないと、あのような壮大な歴史物語?は創れないということにもなります?!とにかく、題材（元ネタ?）は必要であつた!しかし、自分達には、直接にはそれがなかった!だから、話のネタは、すべて他からもってきた?あるいは、どこかの地域・氏族の書き物、言い伝え等を利用した（例えば、『風土記』は、そのための情報収集でもあつた!）?!驚くなかれ?、『旧約聖書』（←景教/唐に伝わっていたネストリウス派キリスト教）も活用されたと思われませんか?!その意味で、物凄い情報収集と創作意欲、そして文才?だったとも言えますね?!

I:利用できるものは、すべて利用した?そういうことですね?

D:そうとも言えますが、一方で、その利用については、それらをもたらした氏族・勢力の意向（思惑?）もあつたのではないか?例えば、聖書の活用は「秦氏」から（秦氏は、ユダヤ系氏族の末裔だった?）?!

I:いずれにしても、「人代（神武以降）」はともかく、そうした「神話（神代）」に託されたものは、ある意味史実であつた?そういうことですよ?

D:もちろんです!ただし、繰り返すように、それは、あくまでも都合のいい史実?の寄せ集めとも言えるものであり、全体を通しての史実?ではないと思います!だから、そのすべてが真実だと思つてはいけません!しかし、その全てを否定してもいけない!まさに、そういうことになるでしょう!したがって、例えば「天孫降臨」などは、その物語が事実（→科学的?）であるかどうかということよりも、そこに示されているものが何かという、その解説（裏読み?）の内容が問われるということにもなりますね?!

I:つまり、そうした解説（裏読み?）は、その「物語」が、どのような史実?

を投影しているのか？そこをきちっと突き止めているのかどうか？そこが、改めて問われるということですよ？！

D:そういうことです！そこで、今、一つのひらめきと言いますか、その神話（物語）の所有者（発信者？）ということで、例えば「天孫降臨」の話は、北方系の太陽信仰、「海幸山幸」の話は、逆に南方系の説話とか言われていますが、一つの解釈方法？として、それらを、どのような氏族（勢力）がもたらしたのか？それを辿っていくと、その氏族（勢力）が、どこからのそれか分かるのではないか？そのようにも思っているのです！

I:具体的には、どういうことになりますか？

D:そう言われても、まだまだ類推の域を超えませんが、前者は、伽耶（金官伽耶？）あるいは扶余・百濟系、後者は、多分？「鴨（加茂）族」のそれだったのではないか？そのように考えてはいますが…

I:ということは、当然？前者は「北方系」、後者は「南方系」だったということになりますね？

D:もちろん、そう単純には言えないのかもしれませんが、私は、今のところ、その「鴨（加茂）族」の頭領？「タケツヌミノミコト」が「神武」のモデルであり、彼らの勢力が、吉備を経由して、近畿・大和に進出（移住？）していった？そして、その仲介者（仲間？）が、瀬戸内海の航海民（海人族）であった「塩土翁（珍彦）→倭直」であったと睨んでいるのです（「神武東征」の元ネタ？）！多分？彼らは、「大山積命」（愛媛県大三島→大山祇神社）を祭神とする勢力でもあった？！

I:そう言えば、その「海人族」は、確か静岡県の「三島大社」にも、その根拠地を有していますよね？そしてまた、「安曇<sup>あづみ</sup>」とか「志賀<sup>しが</sup>」、あるいは「那珂<sup>なか</sup>」というような地名を各地に残しているのは、そうした航海民（海人族）の移動・活動の痕跡？とも言えますよね？！

D:そうですね！おそらく彼らは、随分と早く（弥生時代中期以降？）、黒潮に乗って関東地方にまでも進出していたようです（→神津島の「黒曜石」の採取・分配！）?!大きくは、鉱物資源（黒曜石、朱、銅、そして鉄？）を求めた人々（「山地民」と、それらを運ぶ「交易民」（「海人族」）が、大きなネットワークをつくりながら、先住の農耕民（南方系倭人→安曇族→環濠集落勢力→銅鐸・巴形銅器勢力？）と、ある時は協力、ある時は衝突を繰り返しながら、勢力（影響力）を拡大していった?!その一つの大きなエポック（画期的事件）が、いわゆる「倭国大乱」（2世紀末）ということでしょう?!だから、その「倭国大乱」のことが、もう少し詳しく分かなければいけないのです？「卑弥呼・邪馬台国所在地論争」だけでは、ある意味？何も進んでいかないのです?!

⑤ 「神代」は、神武以降の史実（建国史？）を俯瞰（デフォルメ？）したもの?!

I:そこで、若干唐突ですが、件の「記紀神話（神代）」は、そうした「神武以降の史実（建国史？）」を俯瞰したものということになりませんか？もちろん、それが、BC660年（神武即位年）頃からというのは嘘だと思いますが、倭国大乱後、おそらく3世紀後半？から（「纏向祭政都市」の出現）の史実をデフォルメ？したものということですか？

D:考えてみれば、案外そうだとと言えるかもしれませんね?!自国の歴史を古く見せるために、しかも、神秘的な？国とするために、可能な限りの情報（ネタ？）を集め、それを再構成したということでしょうが、そこには、大きなモチーフ（動機・目的）があった?!つまり、それを、知り得ている神武以降の史実叙述（「人代」）のシナリオ（構想骨組み）とするということであった?!

I:そうすれば、神話ファンには、かなりの興覚めとなるのかもしれませんが、神武以降の「人代」の記事が書きやすくなるし、そもそも自らが欲する歴史を創り出すことが出来る（史実と創作？を混淆させられる？）?!その意味で、「神代」と「人代」は二重の関係、つまり、表向きは「時間的な前後関係」、しかし、事実上は「同時進行関係」であると?!

D:いやはや、とんでもないことが出て来ましたねえ！確かに、これまでは、一応「神話は神話、歴史は歴史！」というように、双方はほとんど（全く？）別の位相で捉えられてきたわけですが、両者の関係が、まさしくそういうものであれば、ある意味ブレない？建国史が描けるということにもなりますね?!しかし、そうなると、これはまた、大変な発見？となりますよ！まあ、多少マンネリズム？を感じている私ですから、新たな挑戦？の契機とはなりますが…いずれにしても、私にとっては、身震いする程の新説（珍説？）となりますね?!

I:そういうことは、私には、直接関係ありませんが、あなたのような自由な執筆家？に出来ることは、そうした、言わば「奇想天外（奇人的？）」な考察（推理？）と言えるのではありませんか？

D:自分で言うのも何ですが、確かに、その通りですね！多少、癪ですが（笑い）？

I:とにかく、部分部分では、辻褄が合わないところ（不整合？荒唐無稽？）があっても、全体としてみれば、ある一つのストーリー（流れ、着弾地）が描ける?!要は、そのためのシナリオ（構想骨組み）があったからだということですよ?!そして、多分？例の「淡海三船」は、そうした事情（からくり？）を知っていた？だから、「神」の使用も、うまく出来た?!

D:あなたも、随分と専門家？になってきましたね？まさしく、そういうことも言えるのかもしれない！そこで、改めて一番の大きなテーマ（枠組み）

は、「天孫降臨」と「国譲り」ということになるとと思いますが、単純に言えば、「高皇産靈神／天照大神（側）」と「神皇産靈神／素戔嗚命（側）」の関係ですね?!

I:前者が「高天原系」、後者が「根の国系」ということですよ?!

D:そうです!それは、「上山春平」という人が指摘されていたということですが、その予定調和的な流れ、着弾（「記紀」の思惑?）はともかく、我が国の建国は、その「高天原系」の勢力が、「根の国系」の勢力に国譲りをさせて（屈服させて→乗っ取り?）実現したものということですよ?!

I:つまり、それは、前者が「持統・藤原政権」であり、後者が「蘇我・物部政権」であるということですね?

D:否、それは、まだ何とも言えません!最終的には、前者が後者を退けて、政権（王権）を勝ち取ったことは間違いありませんが、その政権・勢力が、直前の、「百濟系」同士のそれだったのか、それとも、3世紀以降の、「江南系」あるいは、その後の「伽耶・新羅系」との関係であるのかは、簡単には同定できません?!

I:とは言え、その「高天原系」がどういう勢力・氏族を表しているのかはともかく、もう一方は、「出雲（系）」ということには分かっていますよね?だから、そこら辺りから、改めて考察出来ないのでしょうか?

D:確かにそうなのですが、実は、その「出雲（系）」も、単に地理上の「出雲（島根県）」だけでしたら、まだ分かり易いのですが（それでもかなり複雑?）、他ならぬ近畿大和にも「出雲（系）」はあり（地名もある!）、それらを包含した、言わば「全体の出雲（関東・東北まで?）」が、そこにあるのです!しかも、「持統・藤原政権」が、かの「高天原（系）」と称する勢力・氏族よりも、彼らは、先に?そこにいたのです!

I:だとすると、「出雲（系）」が先にいたから?、「（出雲の）国譲り」というものも実現したわけですから、時間的な関係で言えば、その辺りから突っ込んでいける?そういうことなのではないですかね?

D:それはその通りでしょうが、現在、その「高天原系」と称する勢力・氏族は「吉備」であり、例の纏向遺跡は、彼らを中心にして出来上がったものと考えられます!

I:ということは、やはり彼らが、「高天原（系）」ということになりますか?

D:私も、そのように捉えています。その「高天原系」と称する勢力・氏族が「吉備」であれば、例の「高天原神話」は、本当は「吉備と出雲」（中国地方）の地で繰り広げられた史実を投影させているもので、その後の物語は、その双方の関係が、近畿大和（以東を含む!）でも繰り広げられたものとも言えます?

⑥ 「国譲り」 & 「天孫降臨」が、「記紀」の大きなモチーフ?!

I: さて、ここまで来て、「記紀」の大きな枠組みが、持統・藤原政権が目論んだ?、自らの「正当性」「正統性」を暗喩すべく創作した? 「国譲り」 & 「天孫降臨」のストーリーであったことは分かってきたのですが、改めてそれを、どのような史実?として、いかに読み解いていくかですよな?!

D: もちろん、そういうことかと思えます! いろんな構想 (着弾地) があり得た中で、そのような舞台仕掛けを考えたということは、我が国の建国史が、まさにそのような構図で描ける (描きたかった?) ということでしょうか?! その意味では、まさしく、そのことは真実であった?!

I: そう言えば、丹後半島に伝わる「浦島太郎伝説」や「羽衣伝説」なんかも、実はそういう関わりで見れるようにも思うのですが、いかがですか? それらは、確か室町時代に、「御伽草子」としてまとめられたというようなことを聞いていますが、話の元ネタ?は、そういうところにあつたのではないでしょうか?

D: なかなか、鋭いですね?! おそらく、その元ネタ (少なくとも前者) は、南方系の (したがって「カモ族」の?) 「海幸山幸」の説話が借用 (デフォルメ?) されているように思われますが、丹波 (丹後) の「海人族 (海部氏)」の来し方 (盛衰?) を投影させているのではないかと考えられます! 要は、「神武東征 (→大和政権)」に力を貸し (参画し)、大和に進出し、その後丹波 (丹後) に出て、「日本海ルート」を確立して栄華を極めたが、最終的には、「天孫降臨族 (→持統・藤原政権?)」に干されて (滅ぼされて?) しまった?!

I: つまり、もう一つの勢力、すなわち「瀬戸内海ルート」の勢力の方が、そのイニシアティブを奪った?ということですよな?

D: あなたも、本当に、すごい考察者となったものですね! これも、例の「関裕二」という人の説ですが (他の人も言っている?)、まったくその通りかと思えます! 多分、我が国の建国史 (倭国→日本国) は、この二つの勢力の集散離合、あるいはその二つのルートを巡る争い?の歴史であった?ということなのだと思います!

I: お世辞?はともかく、もし、そういうことであれば、近畿大和における「政治勢力」の結集 (大和王権)、それに関わった関係氏族・勢力の離合・集散だけで、「記紀」の大枠を示せばよかったのに、「九州 (天孫降臨)」が絡んだり、「出雲 (国譲り)」が絡んだりするのは、一体どうしてなのでしょうね?

D: そうですね! ただし、やはり、それも史実であったからであり、そこを抜きにしては、「記紀」の真実性 (信頼性?) がなくなるからだと思います! とにかく、自分達 (現政権) は、そうした史実の上に立った存在である! だから、そこは外せなかった?! つまり、自ら (の氏族・勢力) は、「九州」や「吉

備／出雲」を経て（物理的には経由して？）、現在を迎えている！そういうことだったのではないかと思います？！

I：ということは、彼らは、最初は「九州」にいたということですか？

D：そうですね！「いた」というよりは、まずは、そこに居住（移住・進出？）したということでしょうが、その後、「吉備／出雲」、そして、「近畿・大和」に移動していった？！

I：いずれにしても、その言い方ですと、それ以前は、どこかからか移動してきた！そういうことですよ？

D：もちろん、それは、最初は列島外から、つまり、中国大陸や朝鮮半島からということになりますが、ここでの話とすれば、彼らは、ほとんどは朝鮮半島、なかでも南部（旧伽耶地域）からということでしょうね？！ただし、最終的な氏族・勢力は、おそらく「百濟」、あるいは「百濟系」の人々であったということですよ？！

I：そうすると、そうしたことも含めた一連の史実？を暈す（暗喩する？）ための物語（舞台装置）が、まさに「天孫降臨」や「国譲り」の話ということになりますよね？

D：その通りかと思えます！ただし、自らの出身（地）が言えない（言いたくない？→知られるとまずい？）？そういうことでもあったでしょうが、もう一つは、それ（建国）を神秘的、したがって、高貴なものにしたかった？！そういうことでもあったのではないのでしょうか？！

I：なるほどねえ！しかし、よく考えたものですねえ！

D：繰り返しますように、その元ネタは、誰かの、どこかの説話にあったのでしょうか、それを採り入れ、あのようなドラマ仕立てにしたのですから、大変な文才、想像（創造）力をもった人（達）がいたということにもなりますね！

I：そういうことですよ？！しかし、楽しかったのではないですか？特に、「神話」の創作は？！

D：まあ、それはともかく、史実？としては、「高天原（系）勢力」が、先にいた「根の国（系）勢力」に「国譲り」をさせた！ある意味「乗っ取った？」ということですから、その記述には、それなりの神経は使った？！

I：まさに、「天照大神」と「素戔嗚命」、そして「大国主命」の話（関係）ということですよ？

D：その通りです！それが、ある意味史実？ということですから、その解説が難しいのは、当然と言えば当然なのでしょうね？！

⑦ とは言え、やはり？「記紀」の読み込み（裏読み？）だけでは限界がある？！

I：ということで、今更、こういうことを言うのも何ですが、やはり？「記紀」の読み込み（裏読み？）だけでは限界があるのではないですか？端的に、そこには、解説（裏読み？）者の恣意が大きく働くということですが？

D：それを言われれば、ほとんど身も蓋もなくなるわけですが、だからこそ、そこには、多くの情報、と言うか、より妥当な解説（切り込み？）の視点が必要だということになります？！単なる「いいとこ取り」や「思い込み（入れ？）」だけではいけないということですが、それは、当然と言えば、あまりにも当然でしょう！

I：そうですね！ということでは、もう一つのアプローチである「考古学的発見（考察）」が、大きな力となると思うわけですが、それについては、何か有力な情報（事実？）とかありませんか？

D：実は、それが沢山あり過ぎて、私一人の手では、とても処理できないのですが、前に述べた「吉備」のことは、かなり確実なのではないでしょうか？！何故なら、これは、今では、いわゆる「定説」となっていると思われませんが、例の「纏向遺跡（祭政都市）」（三輪山山麓）では、「吉備」の要素が色濃く示されているのです（例えば「箸墓古墳」の原形は、吉備の「楯突墳丘墓」にあるとか！）！だから、最初の大和政権？は、「吉備」を中心とした部族・勢力であったと言えるのです？！ちなみに、「邪馬台国近畿大和説」の人に言わせれば、「卑弥呼は、そこに眠る『ヤマトトビモモソヒメ』である」ということになるわけですか？！

I：ただし、それ自体は、やはり違うということですよ？

D：もちろんそうですが、そこには、いわゆる「三輪王朝」と呼ぶべきものがあったことは事実です！例の「大物主」（出雲の「大国主命」の和魂にぎみたまと言われています！）と、その姫のことが、「記紀」にあります、その王権は、まさに「出雲」（龍蛇信仰）と「吉備」（太陽信仰）が糾合されているようにも思われます？！ただし、それは、あくまでも初期の大和王権の様相であり、その後は、巨大古墳群の移動の事実からも分かるように、近畿大和は、かなりの変動（王権の移動？）があったことは間違いないと思います！

I：いずれにしても、要は、そのようにして、「記紀」の内容と照らし合わせる事が出来る、そういうことが大切だということですね？

D：そういうことですね！ただし、繰り返すように、「記紀」の記述を妄信してもいけないということですよ！

I：とは言え、まずは、そうしたチャレンジ（ある種の暴走？）は必要なのではありませんか？

D：ある意味？、そういうことになるのですが、あくまでも、「結論先にあり

き？」では困るということです！往々にして、人（私もそうかな？）は、そのようになっていくのでしょうか、それでは、まさしく「記紀」の術中？に嵌ることにもなる?!だが、実際は、その術中？から逃れることは、なかなか難しい?!

I: ということで、改めて、そういうことを確認して、次なるチャレンジとしては、どういうことになりますか？

D: ここでの話からすれば、北部九州を根拠地（出発地）として、近畿大和で王権を確立した関係氏族・勢力が、一体どのような氏族・勢力であったのか？そして、彼らは、何故、ある意味不便な？大和盆地に集結し、そこを都（居城？）としたのか？そういうことを解明することかと思えます！

I: 確かに、不思議ですよ？海が無くて、物資や人の往来も、大変厳しい立地の所ですよ？しかも、弥生時代までは、その地は沼？であったということで、その後盆地となって、人々の居住も始まったということらしいのですが、かなりの湿地帯で、とても「まほろば（佳い土地）」と言えるような場所ではなかった？

D: これについては、再び「関裕二氏」の言ですが、そこは、その関係氏族・勢力にとっては、等しく有利な土地で（方角、距離等）、ここがなるほどと思わせるのですが、守る側にとっては、まさに天然の要害（四方を山に囲まれた盆地!）であった！そして、それぞれ、近場の川・海（航路）に出ていくことが出来た！

I: 要は、四方から集まった、まさに「寄せ集め」の氏族・勢力にあつては、誠に都合の良い場所でもあった？そういうことですね！

D: そうです！そこは、最初は、農耕民（多分南方系？呉族？→「唐古・鍵遺跡」）が扶植したと考えられますが、もう一つは、生駒山地の一角だったと記憶していますが、当時としては、物凄く貴重で、高価であった「朱（硫化水銀）」の大鉱脈があったということです！おそらく、銅鉱床（あるいは鉄も？）もあった?!

I: なかなか面白くなってきましたが、そうは言っても、ただそれだけでは、あのような事態（変化）は考えられませんよね?!

D: 確かに、言われてみれば、そうなのですが、実は、もう一つ大きな理由も考えられるのです?!これも、先の「関裕二氏」の説ですが、そして、それが、私の最も大きな関心事でもある、九州（倭国）との関係なのですが、いわゆる「倭国大乱」（2世紀末）によって、大きな社会変動を迎えた！そこで、いわゆる「環濠集落（巴形銅器・銅鐸）勢力と、「前方後方墳（手焙型土器・火）勢力」、そして、その後の「前方後円墳（銅鏡・太陽信仰）勢力」の、言わば三つ巴の集散離合が繰り広げられた?!

## ⑧ 二つの「倭国」？実は、ここに、その萌芽があった?!

I: さて、またしても、大きな仮説（謎?）が出て来ましたが、その前に、その九州（倭国）との関係とは、一体どういうことになっていますか?

D: まず、これは、『後漢書』や『魏志（倭人伝）』からも明らかなように、北部九州には、当時、いわゆる「倭人諸国（クニ）」があり、中国等へ使いを遣ったりしていました! 「奴国」や「伊都国」と呼ばれていた国が、その中心であったことは、まず間違いないでしょうが（57年の奴国王への金印授与等）、遺跡・考古物等からも、北部九州が、逸早く「国（連合）」としての体裁を取り、特に、鉄の入手、分配（販売?）によって、大きな勢威（支配?）を成していたことは明らかです（半島や大陸に最も近いということも有利な条件であった?）!

I: 確かに、それはそうですよね! しかし、それと、この「二つの倭国」は、どのようにつながるのですか?

D: そう焦らずに聞いて下さい! 私も、自分の（衰えゆく!）記憶力を最大限に駆使して喋ろうとしているわけですから、そうてきばきとは答えられません! 要は、鉄の支配において、他の地域、例えば「吉備」や「出雲」との関係が微妙に変わっていった?! 多分? 「倭国大乱」（2世紀末）は、そういう状況の中での、各地域、各氏族・勢力の、言わば、生死を賭けた諍いということかと思いますが、とにかく、北部九州の優位（支配?）に、何とか立ち向かおうとする氏族・勢力が、もう一つの「中心」を、近畿・大和に作ろうとした?! だから、そこに、「二つの倭国」の萌芽があった? そういうことです!

I: しかし、ただそれだけであれば、何も、二つの「倭国」ということにはならないのではないですか?

D: そうかもしれませんが、近畿・大和の人達も、明確に、自らの国を「倭国」としているのです! しかも、それを、「倭→大倭→大和→日本」（それらは、すべて「やまと（ヤマト）」と呼ばれている!）としているのです! したがって、意外と無視されていると言えますが、その「二つの倭国」の可能性（根拠）は、ある意味明瞭なのです?!

I: 移動している? そして、それは、例の「邪馬台<sub>ヤマト</sub>? 国」と関係がある? そういうことですか?

D: 否、それは、今のところ何とも言えません（特に「邪馬台国」に関わっては?）! ただ、近畿・大和の方も、自らを「倭国」と言っているのですから、北部九州の「倭国」と、まったく無関係だとは言えないということです! 冷静に捉えれば、彼らも、ある時期に、北部九州（とは限らないが!）から、あるいはそこを経由して、近畿・大和に移動・進出していたことは事実なのです!

特に、航海民？海人族（安曇族等）は、早いうちから、日本海沿岸、あるいは東海、北陸、関東、東北？の方までも、移動・進出（往来？）していたわけですから？！

I：ということは、そうした動きを、改めて丁寧に見ていけば、それこそ真実が見えてくるということですよ？

D：とにかく、先程の話に戻れば、北部九州と、その他の地域の人々（ただし、彼らは、すべて倭人集団ではあった！）が、主として鉄の支配を巡って、二つに割れた！そして、その後者の集団の主力（中心？）が、北部九州と地理的に近い「吉備」と「出雲」であった?!そして、さらに、その経過の中で、多分？「出雲」が、守旧派（北部九州寄り→「出雲振根いずもふるね」に投影？）と新勢力派（吉備寄り→「飯入根いいりね」に投影？）に分かれた?!大胆な仮説？とすれば、後者は、攻めよって来た「吉備」と組んだ？あるいは、そこに攻め込まれて踵を返した？その連合勢力が、まさに「吉備・出雲連合？」という形で、近畿・大和に移動し、最初の「大和王権」を確立した?!

I：それが、例の「(出雲の)国譲り」、そして「天孫降臨」の物語となった？そういうことですか？！

D：ほとんど珍説（奇説？）と言われるかもしれませんが、まさにそのように見ると、その後の近畿・大和の史実？が、よく理解されるということですよ?!

I：ここで思い出しましたが、もし、そうだとしたら、例の「前方後方墳」勢力と「前方後円墳」勢力の関係は、どうなるのでしょうか？

D：その辺も、なかなか難しいのですが、確か「前方後方墳」は、最初「近江」に生まれ、まずは「東海」、さらには「関東」辺りまで広がったとされているようです！それについては、「記紀」の崇神期に記されている「四道將軍の全国派遣？」と関係してくると思われませんが、その中の一人「大彦（第8代孝元天皇の子、安倍氏等の祖）」の動きと関係している?!すなわち、彼は、おそらく日本海回りの出雲勢力？、否、件の「吉備・出雲連合？」勢力と思われませんが、彼が、その「前方後方墳」の勢力であった?!ちなみに、その息子とされる「武渟川別たけぬなかわわけ」の動きは、太平洋回りの「吉備・出雲連合？」勢力の動きを投影したものと思われる?!

I：では、もう一方の「前方後円墳」の勢力は、どのような関係となりますか？

D：実は、その「前方後円墳」は、先行の？「前方後方墳」と、いわゆる「円墳」が融合？されたものと考えられますが、多分？それは、大和で発生したもの（北部九州の「津古生掛古墳」が、一番古いという情報もあるが?）?!そして、その「前方後方墳」は、何故か？例の「尾張氏」の象徴とも考えられ、「円墳」は、「物部氏」の象徴とも考えられます?!その辺りからも、関係氏族・勢力の動きや出自等が解明できるのではないのでしょうか?!

⑨ 改めて、「記紀」をどう読み込めばよいのか？ 編纂の意図とか、その関係等は？!

I:であれば、それらに関わって、改めて、「記紀」をどう読み込めばいいのか？そしてまた、それらの編纂の意図とか、あるいはその関係とか？その具体(詳細)が、さらに分かってくるのではないか？そこから、「記紀」、とりわけ『日本書紀』の捏造とか、粉飾の痕跡等がかなり見えてくるということになりませんか？

D:確かに!そして、正式な?「国史」としての『日本書紀』に、私書(秘書?)としての『古事記』は、可能な限りそれへの不満とか、隠された正義(正統性?)とか、言い換えれば真実を…?だが、それは、婉曲に書き記そうとした(攻撃されたら大変なことになるから?)、そういうことだったのではないかとかね?!

I:『古事記』については、撰者の多氏(「太安万侶」及び子孫の「多人長」)の思い、あるいは秘かな告発だった、そういうことですよ?

D:そういうことです!それらについては、「天の書/地の書」あるいは「国外向け/国内向け」というような評価もあるようですが、それは、あくまでも、結果的にそうなった?そのように思います!ただし、そうした「国史編纂」の必要性は、それ以前の「天武天皇」の時に意識されたものですので、その内容自体は、その時々状況によって、かなりの加除修正はなされている?と言うより、藤原・持統体制になって大幅な改編?が施された?!

I:極端に言えば、太(多)氏は、その辺りを危惧(立腹?)し、糾弾?したとも言える?しかし、それは、あからさまには言えなかった?だから、半ば私書(秘書?)として、それを書き記した?そういうことですね?!

D:ええ、そういうことだと思います!ただし、いずれにしても、それらは、ある意味自家に都合のいい?寄せ集めの真実とも言えるものですので、全体を通しての史実ではない!したがって、そのすべてが真実だと思っはいけない!改めて、そういうことになるわけです!

I:だから、その他のツール、アプローチの方法が、一方で重要となるということでしたよね?

D:そういうことですね!そこにどのような史実が投影されているのかは、まずは分からないわけですから、それを推測?する文献や史料に頼らざるを得ないということになります!もちろん、その土地の言い伝え等も、それなりの参考となるでしょうし、「金石文」と呼ばれるようなものがあれば、ほとんど解釈の恣意を許しません?!つまり、誰かの書き換え等はないということです!

I:したがって、そこでは、どのような史実(物語?)があったのか?そこを

きちっと突き止めているかどうか、改めて重要となるということですよ  
ね？

D:そういうことで言うと、氏族・勢力的には、北部九州はもちろんですが、出雲、尾張、近江、そして、「武内宿禰系」の蘇我、葛城、そして紀(木)等が、「記紀」の裏側に封じ込まれていることは明らかなのですが、まさに史実?としては、それは、どういうことであったのか?そこが知りたいということなのです!

I:何とか、新たな突破口が見つからないのですかねえ?

D:ただ、改めて、新たな突破口となるのではないかと思いついていないわけではないのです?!

I:それは、どういうことですか?

D:実は、「物部氏」と「紀(木)氏」との関係ということも言えますが、例の「瀬戸内海航路」の話です!「藤井耕一郎」という人の解明によりますと、そこには山陽沿岸のルートと四国沿岸のルートの二つがあり、前者が「物部系」、後者が「紀(木)系」だったのではないかということです!ちなみに、後者が、実は「武内宿禰系」を指しているということなのです!

I:具体的には、それは、どういうことになりますか?

D:そうですね!最初は(大きくは)、日本海側と瀬戸内海側の、おそらくそこに関わる「海人族」同士の戦い(主導権争い)で、瀬戸内海側の氏族・勢力が勝利し、その後、その瀬戸内海側の氏族・勢力が、さらなる主導権争いを演じ、最終的には、山陽沿岸のルートを支配していた氏族・勢力が、全体の覇を成した!もちろん、前者が、「高天原系」とされた氏族・勢力であったことは言うまでもありません!

I:もし、そうであれば、最初の頃に言っていた、「伽耶(新羅)系」と「百済系」のつながりというか、関係が、その二つのルートに関わる氏族・勢力と対応させられるのではないですか?

D:もちろん、私もそのように睨み始めていますが、果たしてどうなるのか?

I:多少弱気?を感じますが、そこで、件の「武内宿禰(系)」の謎も、かなり解けてくるのではないですか?

D:おそらくそういうことでしょうが、実は、そこに、かの「倭の五王」が絡んでくるのですよ!「武内宿禰」のことは当然ですが、そこに「神功皇后(新羅系)」、「応神天皇(百済系?)」、そして「住吉大神(物部系?)」、さらには「気比大神(ツヌガアラシト→天日矛?)」等が絡んでくるのです!ただし、そこでの「物部氏」と「紀(木)氏」との関係は、それらの錯綜?を、かなりの程度解きほぐすものであるようには感じます?!

⑩ 最後に、「二つの倭国」と「倭の五王」の関係（事実？）をどのように解き明かせばよいか？！

I：ということですが、一応、この『最終版』作成に向けての重要論点整理も、この辺りで終わっておきたいと思うのですが、いかがですか？

D：そうですね！あまり長くやるのも、これまでと同じ轍を踏む可能性もありますので、そして、ある意味切の良いところだとも思われますので、そうすることにしましょう！

I：そこで、ここでは、これまでのこととか、何か補足とか、修正とか、そういったことはないですか？

D：まあ、補足とか、修正とかといったことではないのですが、私の論考（言いたいこと）は、「邪馬台国所在地論争」や、それに関わる「九州王朝説対近畿大和王朝説」のような、言わば「二者択一的論争」では、真の我が国の建国史（古代史）は描けないのではないかとということで、どのような視点・アプローチが必要なのか？そうした観点（スタンス）で、微力、そして、かなり恣意的？かもしれませんが、私なりの考察を進めているということです！単純に言えば、知れば知るほど、よく分からなくなる？だから、本当のことは、まだ明確にはなっていない？そんな思い（感触？）があるのです！

I：いわゆる多くの「通説」「定説」が、実のところは、誰もが納得できる史実（真実）とは言えない？そういうことですね？

D：素人の身で、そういうことを言うのは、かなり烏滸がましいのですが、まさに、そういうことなのです！

I：私としては、そんなDさんの思いも分かりますし、これまで書かれてきていることも、一応、私なりに理解できるものではありませんよ！とにかく、最終的には、「二つの倭国」と「倭の五王」の関係（事実？）が、もう少し説得力のある解明となれば、それこそ、かなりの真実に近づけるような気がしますよ！

D：そうですね！それは、有難いですね！要は、それが、「百済」あるいは「百済系」だけの話なのか？それとも、「伽耶・新羅系」の関わりがあつての話なのか？まさしく、そこが大きなポイントとなると考えているわけですが、ただ現在、そこではっきりしていることは、その大きなポイントの中心にいるのが、「応神」であり、それを取巻く「神功皇后」であり、「武内宿禰」であり、「住吉大神」であるということです?!だから、そこら辺りを、改めて精緻に（総合的に）捉えていく、そうした努力を重ねようとしている次第なのです！

I：その際、余計なことかもしれませんが、そこでは、かの有名な「仁徳」とか、「雄略」とかいうような天皇？は、どのようになるのでしょうかね？多く

の人の、現時点での解釈（通説？）では、彼らは実在の天皇で、まことに重要で、偉大な人物（勢力）のようにも受け取られていますよね？

D:確かにね！しかし、多分？彼ら自体は創作上の人物でしょう?!とは言え、重要なことは、必ずそのモデルとなった人物（勢力）はいたはずですし、そこに、どういう意味を持たせているかだと思います！例えば、例の「聖徳太子」のような人物（蘇我馬子 or 入鹿？）も、そういうからくり？であった?!とにかく、すべてを鵜呑みにしたり、すべてを否定したりすることは、史実の？解明を見誤るということになるということです！

I:確かにそうですが、そうであれば、敢えて言うのですが、Dさんの、ここでのテーマ（仮説？）も、そうした誤謬？に陥っているということはありませんか？

D:残念ながら、そういうことも、実は多々あるのでしょうか?!しかし、私が最もポイントだと考えている、この「二つの倭国」と「倭の五王」の関係（事実？）は、単なる私の思い込み（入れ？）ではなく、中国史書（『宋書』『旧唐書』）にも示されている事実であり、そこに多少の誤認・逸脱等があったとしても、それ自体は信用されるものであるということに立脚していることは、ここでも強く主張しておきたいと思います！

I:分かりました！そこで、最後になりますが、何故？Dさんは、このような我が国の建国史（古代史）に関心を寄せているのでしょうか？その辺が、長年付き合ってきている私にしてみれば、不思議というか、もっと他のことに、エネルギーや時間（余生？）を費やさればいいのかと？

D:そのことは、奥さんにもよく言われますが、結局は、仕方ありませんね！端的に、そう思うのですが、強いて言えば、本当はどうだったのか？そこを、自分の目（力？）で確かめたい、そういうことでしょうかねえ?!

I:まあ、そこまで言われるのであれば、これからも、そのスタンス（執念？）で頑張ってもらいたい他ありませんね！私が言うのも変なことですが、折角Dさんが、最後（期？）の仕事？として、目の疲れや足腰の衰えも顧みず、しかも、ほとんど誰からも評価されなくても、やっていかれていることに拍手を送りたいと同時に、少しでも、その成果？が、私達日本人の、自国の歴史（ルーツや特性等）の解明に役立てば、これほど喜ばしいことはありません！たとえそこに、本当は？、あまり認めたくはない史実があってもですが?!

D:そう言ってもらえれば、誠に嬉しいですね！しかし、そのこと自体は、私にとっては、あまりこだわるものではありません！ある意味、自然の成り行きであり、まさに私の趣味・道楽？でもあるからです！